



ドクター・ブッシュのネパール、 ミャンマー奮戦記

東京女子医科大学八千代医療センター
麻酔科 佐藤二郎



ネパール、ミャンマーという国に対する皆さんのイメージはどういうものでしょうか。ネパールは世界最高峰エベレストを擁するヒマラヤのある美しい国、ミャンマーは昔の国名からビルマの豎琴でしょうか。両国とも一時は自由化闘争の炎が燃えさかりましたが、アフリカや中近東の内乱の続く国々から比べればはるかに平和です。しかしネパールもミャンマーも世界の最貧国です。一人あたりの年間所得は約2万3千円と日本の約165分の1しかありません。ネパールでは首都カトマंडウを離れば、人口10万人に医者1人です。八千代市に医者が2人しかいないのと同じです。

私こと、ドクター・ブッシュはNGO団体ADRAジャパンが行っているネパールでの口唇口蓋裂(※)のボランティア手術に参加してきました。それだけでは物足りなくなり、ADRAネパールやADRAミャンマーが行っている医療保健活動にも参加するようになりました。毎年毎年発展途上国やネパールのような最貧国で生まれてくる子供の数は全世界の実に93%にのぼります。そこでは10人に1人の子どもが5歳の誕生日を迎えられずに亡くなります。日本では250人に1人が5歳までに亡くなりますが殆どは避けられない先天性の病気が事故です。これは世界で一番少ない数字です。ちなみに世界唯一の超大国アメリカでは125人に1人です。貧しい国々では子供たちの亡くなっていく原因の3分の2が肺炎や栄養失調です。

つくづくと思い知らされたのは、健康の問題一つをとっても日本をはじめとする先進諸国が如何に異常な世界なのかということでした。良い悪いは別として、数からいえば貧しい国々の現実が「普通」なのです。

しかし私を虜にしたのはネパールやミャンマーの人々との交流でした。ミャンマーの田舎でフィールド調査をした時、見知らぬ貧しい家に突然入っていった私たちに、自分たちのなけなしの食事をそっくりご馳走してくれた「もてなしの心」に感激しました。それは彼らにとって当たり前のことなのです。そして口唇口蓋裂のボランティア手術では、治りたい彼らと何とか治してあげたい私たちしかいない、その間に何物も介在しないいわば「医療の原点」ともいえる経験をしてきました。

最貧国での専門医で一番役に立たないのは麻酔科医なのです。別に麻酔科医はいなくても手術はできるのです。ネパールやミャンマーでは私は全くのヤブ医者です。ヤブは英語でブッシュです。どこかの国のふんぞり返った前大統領ではありませんよ。そんな役立たずのドクター・ブッシュにも至福の時を与えてくれるネパールやミャンマーの人たちにただ感謝。



東京女子医科大学

八千代医療センター

TOKYO WOMEN'S MEDICAL UNIVERSITY YACHIYO MEDICAL CENTER

